

都市農村交流におけるゲストのホスト化の過程

—岩手県バッタリー村を事例として—

山田義人(東農工大院農)¹・広田純一(岩手大農)²・土屋俊幸(東農工大院農)¹

要旨: 戸数3戸、住民7人の集落、通称「バッタリー村」では、山村生活体験を主とした都市農村交流活動が26年間継続して行われている。活動が継続している理由の一つに、来訪者(ゲスト)が、イベントの運営や、体験時のインストラクター等の受け入れ側(ホスト)の業務について協力してきたことがあげられる(ゲストのホスト化)。ゲストのホスト化の過程を明らかにすることを目的とした。ホスト化の条件として、集落の住民が、地域資源を活かし、相手と接点を見出す交流を意識し、活動の理念を定め実行しながら、来訪者に対してそれぞれの個性に応じた役割の提供を行うことがあげられた。また、協力する過程では、来訪者が村内に自分の居場所や役割を見出し、活動への当事者意識を持つことで、活動の広がりや新たな協力者の確保につながることが明らかになった。

キーワード: 都市農村交流 協力者 ゲスト ホスト 山村生活

Abstract: The Battaly village is a small village composed by 3 households with total number of 7 habitants. The Battaly village continues with Urban-Rural exchange mainly through village life experience for twenty six years. One of the main reasons which activity continue is visitors (guests) help hosts (hosts) activities, management of event and the instructor at the time of experience, etc(guests become hosts). The objective of this paper is to clarify the process of the guests become hosts. We found the condition to become hosts that hosts as the residents of a village make use of local resources, are conscious of the exchange which finds out a point of contact with a partner, provide activity's policy and practice, offer the role to the guests that accepted each personality. Moreover, in the process in which he cooperates, it became clear that a guests find their place to stay and role in village and has the party-concerned consciousness to activity. It lead to a spread of activity and secure a new cooperators.

Key words: Urban-Rural exchange, Cooperator, Guests, Hosts, Mountain village life

I 背景と目的

近年、農村地域を、地域資源を活用した休養の場として活用し、都市住民のふるさとや豊かな自然を求める動きに対応すると同時に、地域の活性化を目的とする都市農村交流活動の取り組みが全国でみられる(4)。一方、農村地域の人員の不足や、住民が目的や手法が曖昧なまま来訪者を受け入れた場合、交流疲れに陥り、活動が継続しないことが課題として挙げられている(3)。

これらの課題に対し、唐崎ら(2009)は、茨城県内の農地を活用した体験活動を行う3つの事例を挙げ、活動の関係者を運営者、協力者、来訪者の3者に分類し、活動の継続には、地域内外の協力者と協力者のインセンティブ(意欲を起こさせる誘因となる外部環境)の確保が必要だと指摘した(1)。ここで、筆者は、来訪者の協力者への転換に注目したい。受け入れ側と迎える側という2つの決められた立場を超えて、お互いの状況を理解し、支えながら継続して交流できることにつながるからである。

そこで、本研究では唐崎らとバーン、L.スミス(1991)のゲスト&ホスト論を参考にし(5)、活動の関係者を表-1のように分類し、ゲストが準ホストの立場になることを「ゲストのホスト化」と定義した。

都市農村交流活動において、ゲストがホスト化するまでに、ホストはどのような働きかけや工夫をしたのか、ゲストは何に魅力を感じたのか、ゲストとホストの間にはどのような交流があったのか、以上の問い合わせることを本研究の目的とした。本研究の対象地は、活動を26年間継続して行い、かつ、準ホストが運営に関わっている岩手県久慈市山形町(旧九戸郡山形村)荷輕部地区木藤古集落、通称バッタリー村を選定した。なお、定義内の「地域」の範囲は旧九戸郡山形村を示すこととする。

表-1. 活動の関係者の分類

Table 1. A classification of the persons involved in activity

分類	定義
ゲスト	交流活動を展開する地域の外部に住み、観光や学習体験等の各々の目的を持って地域へ訪れる人
ホスト	交流活動を展開する集落内に住み、来訪客を受け入れる人
準ホスト	初めはゲストとして来訪し、交流活動を展開する地域の外部に住みながら交流活動の業務に協力する立場になった人
支援団体	交流活動を展開する地域内または周辺で活動し、ホストの活動を支援、応援する立場の人

II 研究方法

1. 調査地概要 バッタリー村が位置する旧山形村(久慈市山形町)は、面積295.49km²、人口3,132人(2005年国

¹Yoshihito YAMADA, ¹Toshiyuki TSUCHIYA (Tokyo Univ. of Agric. and Technol., Saiwai-cho 3-5-8, Fuchu, Tokyo 183-8509),

²Junichi HIROTA(Faculty of Agriculture, Iwate Univ., Ueda 3-18-8, Morioka, Iwate 020-8550) The process of guests become hosts at interaction between Urban and Rural Area-A case study of Battaly-Village, Iwate Pref.-

勢調査), 森林率90.3% (2004年) の急峻な山岳が多い山村地帯である。特産物は、日本短角牛、木炭である。観光地に、平庭高原スキー場、平庭高原白樺林、内間木洞等があり、冬でも観光客が訪れる。

バッタリー村は山形町荷軽部地区内の木藤古集落の通称である。盛岡市から車での所要時間は約2時間である。現在、集落には戸数3戸、住民7人が居住しており、年間約1,000人が訪れる(2011年10月時点)。主な活動は、炭焼きや豆腐作り体験等の、山村生活体験の受け入れであり、年間を通して活動を行っている。村内には茅葺屋根の宿泊施設、体験施設が存在し、約50人の宿泊に対応できる。活動の中心のバッタリー村の村長(以下、村長)夫妻は、80歳を超えており、次期村長や活動の後継者は決まっていない。村長夫妻の主な収入源は年金であり、交流活動の収入分は主に活動費として使われる。

1983年に旧山形村にツアーデ訪れた東京の消費者団体「NGO大地を守る会(以下、大地を守る会)」の会員約50人との交流の際、受け入れ先となった木藤古集落の住民は、山村生活を代表する「バッタリー(沢からの流水と水車を利用して石臼を引き雑穀を精穀する、丸太をくり抜いた道具)」を復元し、地域の食材を使ってもてなした。都市住民が村内の資源に興味を示したこと、集落の住民は、山村生活に自信を持った。そこで、村長は、当時の住民15人(戸数5戸)で話し合い、集落全体で協力し、山村生活の素晴らしさを残し、外部に伝えていくと考え、1985年7月14日に活動を開始した。この時、村の通称を「バッタリー村」と決め、村の活動理念を「バッタリー憲章」に定めている。開村後は、集落の景観や、活動を評価され、「いわて景観賞」(1995年)等を受賞している。

2. 調査方法 調査期間は、2010年6月から2011年1月であり、聞き取り調査を計13人、観察調査を計18回と、資料・文献調査を行った。

III 交流の実態

1. 関係者、関係団体の洗い出しと分類 村内の壁や看板には計33団体、開村20周年記念寄稿文集には計31人の名前や肩書きが記載されていた。それに聞き取り結果と合わせ、重複した分を除き、表-2. の分類の定義に基づいて図-1. のように分類した。

2. ホストの働きかけと工夫 ホスト側の中心である村長(80歳、男性)は、村外の人と一緒にバッタリー村を作り上げたいという思いを持っており、協力者が増えることで自信につながっていた。相手と共に点を見出すこととして、来訪者に壁や看板に名前を書いてもらい、動物の名前をつけてもらう工夫をしていた。

3. 支援団体の支援 活動を始めた1985年当時の旧山形村の村長(60代、男性)は、個人所有の山をバッタリー村に貸し、バッタリー村の村長を応援するなど、地域内の行政がバッタリー村の活動の支援を行っていた。

4. ゲストの意識 団体リピーターの大地を守る会は、30年間継続して山形町ツアーハーの一環としてバッタリー村を訪れている。1994年にツアーパートナーとして村を訪れた料理研究家のL氏(60代、女性)は、村の水の味や、馬の命名への関わりに魅力を感じ、山形町の日本短角牛生産農家やバッタリー村の個人的なリピーターとなり、東京から一度来村する度に合計約10万円の費用がかかるにも関わらず来村し続けている。

表-2. 団体の分類と定義

Table 2. A classification and the definition of the group

分類	分類	定義
ホスト	住民	交流活動を展開する集落内に住み、来訪客を受け入れる人
準 ホスト	ボランティア ^(註1)	インストラクターとして運営に協力し、ホストから講師料を受け取る場合がある人
	サポーター	バッタリーネット ^(註2) に所属、またはバッタリーネットに一時的に協力し集落に訪れる人
	アドバイザー	村の活動の運営や山村資源の利用方法について助言を行う専門家
	OB・OG	上記の3つのいずれかの立場で関わっていたが、2年以上集落に訪れていない人
ゲスト	リピーター	集落に繰り返し訪れる人
	学校(地元以外)	講義や実習で集落に訪れる久慈市外の学校
	学校(地元)	講義や実習で集落に訪れる久慈市内の学校
	個人・ グループ客	講義や実習、取材、研究以外の目的で、集落に訪れる人、団体
支援 団体	視察者	取材や研究を目的として、集落に訪れる人
	行政	岩手県内の地方公共団体
	町内団体	山形町内外に存在し、村の運営に協力する団体
類似団体	類似団体	近隣町村で、地域活動を行う団体

注1:ボランティアは、講師料を受け取る場合があり、バッタリーネットの活動の中心ではない人を指し、サポーターと区別している。

注2:「バッタリーネット」とは、バッタリー村に繰り返し訪れる人を集めたファンクラブのようなサポーター組織でありD氏が代表を務める。イベントや集いがある時に、メールで誘いが来る学生や卒業生が主な会員であり、2003年から2005年にかけて自然発生した組織である。組織の構成人数や、行動記録等、正式な記録は存在せず、人によって定義や会員人数の認識も様々であるが、ここでは「緩やかな横の連携の組織」とみなす。

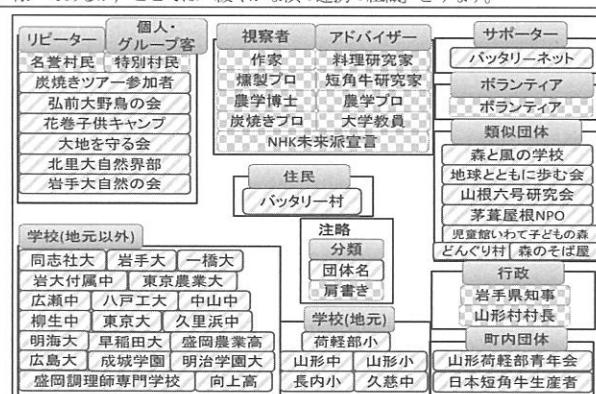


図-1. 関係者、関係団体の分類

Fig.1 Person concerned, the classification of the affiliate
資料:引用文献(2), 村内の壁や看板に記載されている
団体名、村長への聞き取り結果より

IV ゲストのホスト化の過程

1. 個別具体例 訪れるゲストがホスト化するまでの過程を、準ホスト 10 人への聞き取りから、それぞれの個別具体例を基にして明らかにする。聞き取り対象者の情報は表-3 のとおりである。

表-3. 聞き取り対象者の情報

Table 3. The information of the person of hearing object

対象	年齢	性別	住まい	職業	初来村時の立場	準ホストの立場	現在の来村頻度
A 氏	20代	男性	久慈市	無職	個人客	ボランティア	月に数回
B 氏	20代	女性	久慈市	無職	個人客	ボランティア	週に1回
C 氏	30代	女性	岩手町	(不明)	個人客	ボランティア	月に数回
D 氏	50代	男性	花巻市	会社員	グループ客	サポートー	数ヶ月に1回
E 氏	30代	男性	盛岡市	会社員	グループ客	サポートー	数ヶ月に1回
F 氏	20代	男性	盛岡市	学生	学校(地元以外)	サポートー	数ヶ月に1回
G 氏	20代	男性	盛岡市	学生	学校(地元以外)	サポートー	数ヶ月に1回
H 氏	50代	男性	盛岡市	大学教員	視察者	アドバイザー	半年~1年に1回
I 氏	20代	男性	熊本県	施設職員	個人客	ボランティア -OB・OG	約2年前に来村 して以来、来村無
J 氏	30代	男性	北海道	会社員	グループ客	サポートー -OB・OG	約3年前に来村 して以来、来村無

注：2011年3月時点での情報を示す。

E 氏と J 氏には質問票をメールで送付し、不足部分は電話で聞き取りを行った。

資料：聞き取り調査より

(1) A 氏がボランティアになる過程 大学で地域活動支援を学び、地元の久慈市での活動を模索していた A 氏は、2008 年にテレビ番組を観て、当時バッタリ一村に住み込み、山村生活を学んでいた I 氏のことを知り、同年 2 月か 3 月に初来村した。I 氏に会えたのは同年 9 月に来村した時だったが、その時、村長からイベントのアイデアを求められ、「自分はお茶出しができるので茶店をやりましょう。」と協力し、村長もそのアイデアを採用し、本番も成功し A 氏は活動へのやりがいを感じた。その後は、インストラクターやイベント時の連絡係を引き受け、村の運営に関わり、活動への当事者意識が芽生えていった。

(2) B 氏がボランティアになる過程 村長の知り合いだった B 氏の父が、村で行われたイベント「第5回縄ない選手権大会」を取り上げた新聞の記事を見て、家族で観光しようと言い出し、B 氏は 2009 年に初来村した。B 氏は高校卒業後、定職につかなかったので、B 氏の父が村長に「何か娘の手伝うことはないか」と頼んだ。そこで、村長は B 氏が草木染めに興味を持っていることを知り「興味があるなら手伝ってくれないか」と頼み、B 氏は「時間もあるし、とりあえずやってみようかな」と思い、取り組んだ。村内の資源を使った草木染めで多様な色を出すことを楽しく感じ、それをインストラクターとして来村者に教えることにやりがいを感じるようになった。また、リピーター

を増やすための工夫を考える等、活動への当事者意識が芽生えていった。

(3) C 氏がボランティアになる過程 C 氏は、2009 年 3 月に北東北で地域活動を行っている人の集まるイベント「凡人大会」で村長と出会い、「いつでも来村してください」と誘いを受けた。自然に囲まれた中での生活に興味を持っていた C 氏は山村生活を学ぶために来村し、学ぶ代わりにイベントの協力も行っている。

(4) D 氏がサポートーになる過程 D 氏は、1989 年 11 月に行われた第十回東北自然保護の集いの開催地としてバッタリ一村を選び来村した。自然に負荷をかけない暮らしに興味を持っていた D 氏は、バッタリ一村で村長の父や、村民の暮らす技術や知恵、文化に大変興味を持った。D 氏は山村生活を残したいと考え、初来村以降、自身が関わる自然保護団体や学生を村に誘致し続けている。訪れるうちに村長から運営の相談を受けるようになった D 氏は、バッタリーネットのまとめ役となり、現在もイベントの協力をを行い、準ホストの中でも村の運営に最も深く関わっている。

(5) E 氏がサポートーになる過程 E 氏は学生時代に、学生と社会人が所属する自然保護サークル「岩手自然の会」に所属しており、サークルと関係があった D 氏に連れられて村にやってきた。2000 年に体験施設「森のてらこや（学習交流館）」の建築にも携わり、バッタリーネットにも所属し、D 氏と共に継続的に協力をしている。

(6) F 氏・G 氏がサポートーになる過程 F 氏と G 氏は、岩手大学農学部の学生である。2009 年 7 月に H 氏が担当する現地実習のため初来村し、宿泊体験を行った。バッタリーネットも協力のため訪れており、2 人はそこで D 氏、E 氏と出会い、「木を運ぶのを手伝ってくれ」と頼まれ手伝った。その後も、D 氏や E 氏から連絡や誘いがあり、2011 年 3 月時点で、F 氏は計 5 回、G 氏は計 9 回来村している。G 氏は、E 氏から 2010 年の縄ない選手権のイベントの総合司会を任せられた。「少し大変だがお世話になっているし、人出も足りないので手伝おう」と、活動への当事者意識が生まれていた。

(7) H 氏がアドバイザーになる過程 H 氏は、農村計画専門の岩手大学教員であり、旧山形村グリーン・ツーリズムへの提言の報告書作成を目的に、1996 年に初来村した。報告書作成後も、村長から運営に対する助言を求められており、直筆の手紙で相談を受けることもあった。2000 年に村長を岩手大学の講義に講師として招き、2005 年からは毎年、現地での実習のため、学生を村に連れて行っている。2006 年には、バッタリーネットの人から頼まれ、茅葺屋根の葺き替え費用の寄付金集めを行う「バッタリ一村を支援する会」の代表になり、このときは約 200 万円が全国の村

の関係者から集まつた。H氏は「村長や、バッタリーネットのD氏をはじめとする村の方々は、人を引き込み、役割を用意するのが上手い」と感じながら、H氏自身も自分の活躍する機会を与えられていたことを嬉しく感じていた。

(8) I氏がボランティア～OB・OGになる過程 I氏は、大学在学中に日本中を旅して農業や牧畜を勉強していた時に、バッタリーベルでは藁草履体験ができると知って2006年1月に初来村し、山村生活に興味を持った。2009年2月まで、1か月以上の滞在を計5回行っている。3回目の来村の前には、大学を中退し、長期間村で勉強しよう決意したほど村との出会いは大きかった。2008年8月には、I氏が山村生活の素晴らしさを伝えたいと思い、炭焼きツアーワーク自分で企画し、村長は「興味のあることは好きにやつていいよ」とI氏を応援した。I氏は熊本県での就職を機に村に訪れていないが、25周年記念行事の際には電報を届け、村から離れた場所に住んでも関わりを持ち続けている。

(9) J氏がサポート～OB・OGになる過程 J氏は、1994年に弘前大学のサークルの集まりでバッタリーベルに初来村した。そこで、茅葺屋根の民家の風景を見て、村をふるさと感じた。学生時代は年間約4回来村し、卒業後も盛岡在住中には、D氏やE氏と共に、20周年記念行事に関わる機会があり、バッタリーネットの事務局も引き受けた。J氏は自分にできる仕事を行い、村に協力したいと考えていたが、北海道への移住を機に、協力が難しくなった。

表-4. ゲストのホスト化の過程の比較

Table4. Comparison of an individual example

対象	初来村目的	自発性	ホスト・準ホストからの働きかけ	働きかけをした人物	ホスト化のやりとりが初めて起きた時期	対象者の主な興味
A氏 I氏に会う	○	○	インストラクターの協力の要請	村長	2008年	地域づくり
B氏 家族で観光	△	△	インストラクターの協力の要請	村長	2009年	草木染め
C氏 山村生活の学習	○	○	学習の場の提供	村長	2009年	自然の暮らし
D氏 自然保護団体の集い	○	○	活動の相談	村長	1989年～1995年	環境に負荷をかけない暮らし
E氏 サークル活動	△	△	活動の協力の要請	D氏	1995年	自然の暮らし
F氏 大学の実習	△	△	活動の協力の要請	D氏, E氏	2009年	自然の暮らし
G氏 大学の実習	△	△	活動の協力の要請	D氏, E氏	2009年	自然の暮らし
H氏 報告書作成	△	△	活動の相談	村長, バッタリーネット	1996年～2000年	地域づくり
I氏 わら細工加工の学習	○	○	学習の場の提供	村長	2006年	自然の暮らし
J氏 サークルの先輩に誘われて遊びにいく	△	△	活動の協力の要請	D氏, E氏	1994年～1998年	自然の暮らし

注: ○→自発的に来村を決めた。△→誘われて来村を決めた。または、調査・実習等で来村を決めた。

資料：聞き取り調査より

2. まとめ 準ホストの調査結果より、ホスト化の過程において、ホストまたは準ホストからゲストに対して、それぞれ個性に応じた役割の提供が行われていたことがわかつた。村長は、地域活動や山村生活に興味を持っていた

A氏、B氏に対しては協力の要請を行い、学ぶ場所や機会を求めていたやる気のあるC氏、I氏に対しては場を提供して応援し、村に価値を見出し力になってくれそうなD氏、H氏には相談を行っていた。また、準ホストとなったD氏が学生のE氏、J氏を、D氏とE氏がF氏、G氏を村に誘ったように、準ホストが新たな協力者を連れてくる場合も見られた。さらに、準ホストのホストへの継続的な協力や、マスコミの影響も、来訪者の増加につながった。また、準ホストは関わる過程で、村内に自分の居場所や役割を見出し、活動への当事者意識が生まれていった。

Vおわりに

以上より、ゲストのホスト化の条件として、以下のこと事が考えられる。ゲストには伝統的山村生活への興味、理念への共感、活動への参加、ふるさとの場を求める個性が必要である。一方、ホストは、相手との接点の発見、地域資源の活用、理念を実践に移す意識、ゲストの個性に応じた役割の提供が必要である。

L氏や、I氏やJ氏の例もあるため、ゲストの活動に協力できる時間や、住む場所がどの程度ホスト化の阻害要因になるかの検討については今後の課題としたい。

また、村長の高齢化と、後継者の不在は、準ホストの確保が、ホストの定住人口の増大と、次世代の活動の継続に必ずしも結びつかない可能性を示しているとも言える。

最後に、後継者の確保と言う点で課題は残したもの、ゲストが村内において自分の居場所や役割を見出す交流を行ってきたバッタリーベルの、ホストの働きかけや工夫は、都市農村交流活動において課題となっている協力者の確保と、活動の継続の面で参考にできる部分が多いと考える。

引用文献

- (1) 唐崎卓也・安中誠司・木下勇 (2009) 農業・農村体験活動関係者の参加モチベーションとインセンティブ. ランドスケープ研究 72 : 835～840.
- (2) バッタリーベル (2005) バッタリーベル開村 20周年記念誌つどいつむぎつたえよう—山村からのメッセージ. 51pp., 同村, 岩手.
- (3) 森戸哲 (2001) 都市と農村の共生を考える～交流活動の現場から～. 農村計画学会誌 20 : 170～174.
- (4) 大浦由美 (2008) 1990年代以降における都市農山村交流の政策的展開とその方向性. 林業経済研究 54 : 40～48.
- (5) バレーン. L. スミス(1991) 序論. (観光・リゾート開発の人類学 ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応. バレーン. L. スミス編, 三村浩史監訳, 394pp., 効率書房, 東京). 14～15.